







ぶきつちよ真面目の歌人生 三浦洸一



加来のぶゆき
Kaku Nobuyuki



目次

十一	辛い別れ	46
十	有楽町で逢いましょう	42
九	映画初出演	38
八	ラジオが生んだ大ヒット	34
七	売れるゆえの悩み	30
六	スター歌手への道へ	26
五	待望のヒット曲	22
四	デビュー曲	17
三	出会い	14
二	新人歌手誕生	11
一	きっかけ	9
	ごあいさつ(はじめに)	6

十二	結婚	50
十三	試練	55
十四	東京オリンピックの歌	59
十五	紅白落選	64
十六	時代の流れ	68
十七	独立	71
十八	私が東京に行った頃	76
十九	初めて三浦先生に会った日	79
二十	先生と共に	85
二十一	歌手の裏方として	90
二十二	ナツメロブーム到来	93
二十三	ありがとう先生	97
二十四	さようなら先生	103
二十五	リサイタル	106
二十六	運命の再会	109
二十七	お寺キャンペーン	113

二十八	福沢諭吉	118
二十九	バラエティからの誘い	120
三十	TBSからフジテレビ	124
三十一	大手術	128
三十二	記念パーティー	132
三十三	別れの連鎖	136
三十四	恩師との別れ	140
三十五	吉田正音楽記念館	144
三十六	突然の病 <small>やまい</small>	147
三十七	恩師に捧げるコンサート	150
三十八	ファイナル	154
	三浦洸一から御挨拶（おわりに）	157
	歌手生活の歩み ディスコグラフィ	160

いあいやつ (はじめに)

神奈川県三浦市、三崎漁港のすぐそばにある、長い石段を登って行くと、お寺があります。浄土真宗本願寺派、最福寺、さいふくじここが桑田利康の生家です。昭和三年一月一日に三男一女の末っ子として生まれた彼は、幼い頃から父の読経を聞いて育ち、お経も唱となえられる様になっていました。

しかし彼は歌が好きで、船乗りの友人と寺の本堂で好きな歌を唄うのが何よりの楽しみでした。人前で唄う事に興味を持ち、やがて辻堂で行われたのど自慢に出て、決勝まで残りましたが、最後の決勝戦で曲目を代えて挑いどんだのですが、歌の出だしを間違えて負けてしまいました。

やはり楽譜が読めないとダメだと思つて彼は、音楽学校に行く決心をします。終戦後、都内に住んでいた姉を頼つて、東洋音楽学校（現在東京音楽大学）に入学しました。

在学中に学校の友人に誘われて、ビクターレコード会社の新人テストに行きました。

友人が唄った後、「あなたも唄ってみて下さい」と審査員に勧められて唄いました。

それが審査員の注目を集め、合格してしまひまして、すぐにビクターレコードの専属になった

のでした。学校に通いながら、歌謡曲のレッスンを受け、その後デビュー曲も決まり、二曲目に出した歌がたちまち大ヒットになって、いつの間にかスター歌手になってしまいました。あれよあれよと言う間に、本人の意思とは別に売れ出しまして、何だか信じられない状況になっていました。

芸名もビクターが決めてくれましたので、その名前こそが三浦洸一でした。それ以降、桑田利康は三浦洸一で生きる事になったのです。

数々のヒット曲を出した彼でしたが、実直誠実、真面目な性格で生きてきましたので、これから入った芸能界でどうなるのか分からないままに、歌手として唄い続けてきました。

本書の著者、私は三浦洸一という歌手人生の途中で、意外な事から出会う事になったのですが、そのいきさつは文中に書きました。

三浦よりも二十歳も年下の私ですから、彼のデビューから二十年程は何も知りませんが、その後彼に付いて生きる間で、ビクターの関係者や先代のマネージャー、当時の雑誌の取材記録と、もちろん本人の話を参考にして、若い頃の三浦洸一の生き様生きさまを書かせて頂きました。

私が付き人となって、先生と呼びながら五十三年も一緒に生きる事になるとは、夢にも思っていませんでした。

自分の思いをそのまま口に出す事のない人でしたので、初めは三浦先生の性格を覚え込むのに

時間がかかりました。おそらく本人も私の事をそう考えていたのだと思います。

晩年になってからは、お互いに本当に解り合えてきたように感じて、私にとつてかけがえのない師となっていました。

派手な世界に飛び込んだ地味な歌手、三浦洸一、今は知っている人は少ないと思いますが、大勢いる歌手の中で、こんな歌い手もいました、と言う事をできるだけ多くの人々に知ってもらいたくて、私はこの本を書く事にしました。

三浦洸一と言う歌手人生の悲喜こもごもをどうか幕が下りるまで、ゆっくりご覧下さい。

著者 加来かくのぶゆき

一 きっかけ

昭和二十六年音楽学校声楽科に通っていた桑田は、友人に誘われてビクターレコードの新人テストに行きました。当時のビクター築地スタジオで行われましたが、彼は別に歌手をめざしていたわけではありませんでした。ただ歌が好きで、声楽の勉強をする為に、それまで勤めていた故郷の地方事務所を終戦と同時期に辞めて、姉の勧めで都内の音楽学校に入学しました。

この日は、テストを受けてみたいと言う友人に、ただ一緒に付き添って、ピアノ伴奏をするつもりで来たのですが、伴奏の人はちゃんと準備していました。

友人は、何人かの審査員の前で、まずは無難に唄いました。友人が唄い終わりますと、「そちらの君も唄ってみないですか、せっかく来たのだから唄ってごらんさいよ」

そう言ってくれた審査員の方がいました。

桑田は言われるままに、唄う事にしました。得意としていた、ドイツのクラシック作品をアカペラ（無伴奏）で朗朗と唄い上げました。審査員は、その声量に少し驚きましたが、これは流行